

女真文字談義 (2)

—アルタイ諸語、女真語と満州語の関係、女真語と満州語の差異の等級—

吉池孝一

東アジアの解説が必要な“文字と言語”に関心を持つ学生と教員の対話です。登場人物の設定は次のとおりです。

佐藤久美^{さとうくみ}：学生。歴史一般に関心がある。

山村健一^{やまむらけんいち}：学生。入門段階のいろいろな言葉の学習を趣味としている。

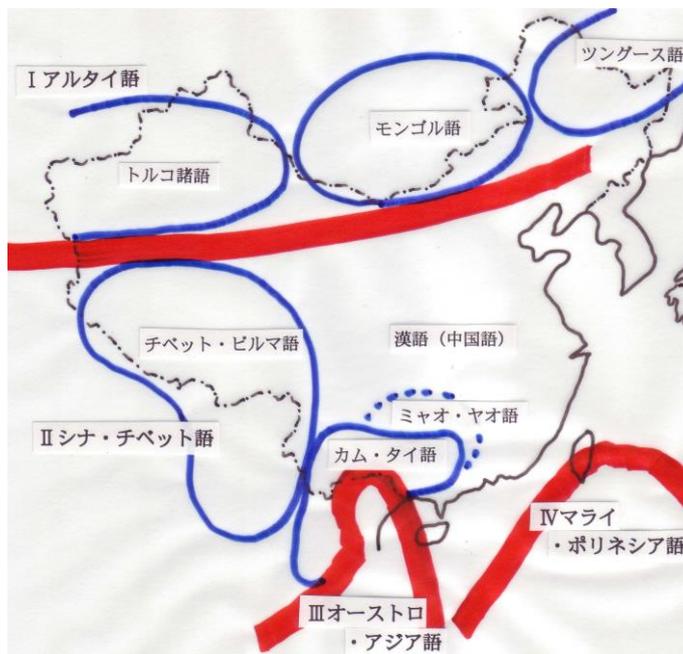
安井教授^{やすい}：漢文の教員。いろいろな文字に関心がある。学生とともに金朝の言葉と文字の勉強をはじめた。

〈第2回目〉

安井教授：前は、簡略な言語地図をみながらツングース語が分布する地域を確認しました。そのおり、ツングース語とはどのようなものか、ということが課題としてのこりました。まずはこの点を確認しましょう。

《アルタイ諸語》

安井教授：これは前回の簡略な言語地図です。



『言語学大辞典』（1988年、三省堂）によると、トルコ語系統の諸言語と、モンゴル語系統の諸言語と、ツングース語系統の諸言語のそれぞれが、言語の面か

らみて系統を同じくしており、チュルク語族、蒙古語族、ツングース語族とされます。しかし、三つの語族が互いに親縁関係にあるかどうかについては、議論の最中のようなのです。

山村健一：しかし、この三種の言語、よく似ているという印象はあります。

佐藤久美：そういえば、山村さんはトルコ語とモンゴル語ができましたね。

山村健一：できるというほどではありません。トルコ語もモンゴル語も入門の段階をかじった程度です。佐藤さんこそ、満州語の授業にでていたのではないですか。

佐藤久美：簡単な文章を、辞書を使って読んでいます。いずれは、清朝の歴史に関わる資料を読めるようになりたいです。

安井教授：それは心強い。系統の問題は別として、この三種の言語、たしかによく似ています。発音の面では、“母音調和”がある。また、日本語のように、語幹に接尾辞を付着させて文法関係を表す“膠着語”的な構造をもっている。修飾語が被修飾語の前にくる。目的語が動詞の前にくる。これも日本語と同じです。

《トルコ語とモンゴル語》

安井教授：山村君、トルコ語とモンゴル語の例をあげてくれませんか。

山村健一：教科書にこんな例があります¹。

トルコ語 ファトマ こうえん で うつくしい ー むすめ みる た
fatma park/ta gyzel bir kiz gær/dy
ファトマ パルクタ ギュゼル ビル クズ ギョルト
ファトマは公園で美しい（一人の）娘を見た。

モンゴル語 わたし これ ほん を よむ た
b i: en nom/i:g onj/la:
ビー エン ナーグ オンジャー
私はこの本を読んだ。

安井教授：語幹と接尾辞の母音に、同類のものが使われる、というのが母音調和です。トルコ語の fatma や parkta の a 、 gyzel の y と e 、 gærdy の æ と y は同類の母音です。母音には、a,i,u,o と e,i,y,æ のグループがあり、互いに混じることがない、というのがトルコ語の母音調和です。モンゴル語のほうは、onjla: の o と a に母音調和がみられます。ですから、onjle:とはならないのです。

佐藤久美：トルコ語の parkta の ta や gærdy の dy 、モンゴル語の nom:i:g の i:g や onjla: の la: が、文法関係を表す接尾辞で、このように接尾辞を付着させるのが“膠着語”

¹ トルコ語は勝田茂 (1986) 『トルコ語文法読本』 大学書林の第5版 (1996)、モンゴル語はモンゴル国立大学モンゴル語研究室編、岡田和行編訳 (1989) 『モンゴル語教科書』 東京外国語大学発行による。

的な構造というわけですね。修飾語＋被修飾語、目的語＋動詞である点も、この例でわかります。

ところで、トルコ語例文の目的語^{むすめ}kizに、対格（～を）の格語尾がないのですが、どうしてでしょうか。

山村健一：対格（～を）の格語尾ですが、特定の目的語には付き、不特定の目的語には付きません。このような用法のためです。例えば、

みず	を	のむた		みず	のむた
su/ju		ıfı/ti		su	ıfı/ti
ス		イティ		ス	イティ

(ある特定の) 水を飲んだ。 水を飲んだ。

《満州語文語》

安井教授：佐藤さん、満州語の例をお願いします。

佐藤久美：はい。これは、口頭語ではなくて、伝統的な文章語の満州語文語の例です²。

満州語	ゆえなく	ぜに	を	だます	受身	へして	もっていく	受身	た
	baibi	džiha	bə	əitərə/bu/f	i		gama/bu/ha		
	バイ化	ジハ	ベ	エイテラフイ			ガマブハ		

故なく錢をだまされて持って行かれた。

トルコ語やモンゴル語と同様に、目的語＋動詞の語順です。この例には、修飾語と被修飾語はふくまれていませんが、他の文例によると、修飾語＋被修飾語となっています。

安井教授：džihaの後ろの対格（～を）は、baではなく、bəですね。母音調和はみられません。満州語文語のばあい、格語尾は独立性が強いようです。いっぽう、gamabuに付着した過去をあらわす接尾辞-haは、母音調和しています。ですから、gamabu heとはなりません。

山村健一：gama(持って行く)+bu(受身)+ha(過去)をみると、語幹にペタペタと接尾辞を付着させて文法関係を表す“膠着語”的な構造であることがよくわかります。

佐藤久美：トルコ語とモンゴル語と満州語文語がよく似ていることはわかりました。ところで、蒙古諸語とツングース諸語は地域としては隣りあっています。言語として、どこが異なるのでしょうか。

山村健一：“膠着語”的な構造であるところは似ていますが、使われている語彙そのものが違うのではないのでしょうか。

安井教授：両語族は隣りあって接触しているので、互いに借用する語彙は少なくないでしょう。しかし、そのような借用語を除けば、二つの語族はそれぞれ特徴のある

² 舞格著、程明遠校『滿漢字清文啓蒙』(1730年序)の第三卷「清文助語虚字」の例による。

語彙によって分けられるはずです。

《女真語と満州語の関係1》

山村健一：問題となる女真語と満州語は、ともにツングース諸語としてまとめられます。両者の関係をどのように考えたらいいのでしょうか。

安井教授：いろいろな考え方があろうです。かつて、長田夏樹という先生が「満州語と女真語」（1949年）という論文のなかで³、女真語は「満州語においてすでに失われた古い特徴を有するが、満州語とは別個の他のトゥングース系の言語ではなくその直接の祖語と考えられ、満州文語に対して中古満州語と称することができる」といっています⁴。1949年のことです。

山村健一：女真語は中古満州語だというわけですね。“祖語”とありますが、祖先の言語というくらいの意味でしょうか。先日、比較言語学の講義で、祖語の話は聞いたのですが、それとは違うようです。

安井教授：比較言語学の方法によって同系統の諸言語の起源を再構築したものを祖語といいますが、長田先生のいう祖語は、比較言語学でいう祖語（共通祖語）ではなく、山村君のいうように、同じ方言の“祖先の言語”というくらいの意味のようです。

佐藤久美：ところで、満州語ではなく、“満州文語に対して”とことわっていますが、“文語”とすると、どういうことになるのでしょうか。

安井教授：言語には方言の違い、方言と共通語の違いがあります。また口頭語と文章語の違いもあります。満州文語（満州語文語）といったばあい、口頭語に対する文章語のことです。言語を文字で書き表すときに、語彙や表現方法、発音までもが、実際の言語のなかから選び出され、規範化されます。役人の言葉や伝承の語りの言葉など、比較的典雅な、また古い言い回しや発音が選択される傾向にあります。これが文章語として成立すると、変化しにくいものとなります。

佐藤久美：満州文語というのは、満州文字で書き表され、規範化された満州語、という意味ですね。

山村健一：幾つかの方言において共通して使用される文章語だとしたならば、方言の差を越えて利用できるのも、便利といえば便利です。

佐藤久美：女真語も女真文字で書き表すときに、ある程度は規範化されたはずですから、規範化された女真文字・女真語は、規範化された満州文字・満州語（満州語文語）の直接の祖先だということになりますね。

山村健一：長田氏は、“満州語”といわずに“満州文語”といって、方言の差異を越えた文章語であることを強調したわけですね。巧妙な表現だと思います。ところで、

³ 『神戸言語學會報』1, 1949年。

⁴ この説は長田夏樹「女真文字」（『アジア歴史事典』平凡社, 1960年）にもみえる。

中国の研究者の考えには、どのようなものがあるのでしょうか。

《女真語と満州語の関係2》

安井教授：女真語研究の基本書ともいうべきものに、金光平・金啓孫氏の『女真語言文字研究』(文物出版社, 1980年)があります。そこでは「女真語は満州・ツングース語族中の満州語の祖語であるという結論は肯定することができる」⁵、とあります。

山村健一：“満州語の祖語”とあります。ここでいう“祖語”も、比較言語学でいう祖語ではなく、長田夏樹氏の“祖語”と同じく、直接さかのぼることができる祖先の言語という意味と理解することができます。そうしますと、ほぼ長田氏の考え方と同じことになりますね。

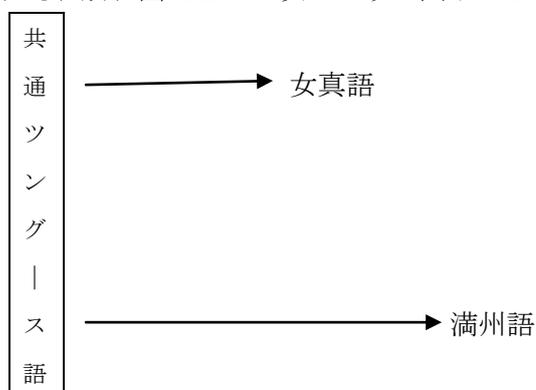
佐藤久美：“満州・ツングース語族”とありますが、“ツングース語族”と、どこが違うのでしょうか。

安井教授：同じものでしょう。満州語はエウエンキー語(Evenki)など他のツングース諸語と特徴を異にするので、満州・ツングース諸語またはツングース・満州諸語と呼ぶようです。なお、満州語と女真語は他のツングース諸語に比べて類似しており、そのことより、満州語の系統のなかに女真語を含めるのが一般的な分類のようです⁶。

《女真語と満州語の関係3》

山村健一：ほかには、どのような考え方があるのでしょうか。

安井教授：西田龍雄という西夏語研究の先生が、「東アジアの文字」(『世界の文字』大修館, 1981年)のなかで、女真語は満州語の直接の祖先ではなく、共通ツングース語からそれぞれ別れ出たとして次のように図示します。



山村健一：“共通ツングース語”というのは比較言語学でいう祖語(共通祖語)のことで

⁵ 女真語は満洲・通古斯語族中満語的祖語這一結論，仍然可以肯定。

⁶ 池上二良(1989)「ツングース諸語」『言語学大辞典 第2巻』: 1058-1083を参照。

すね。

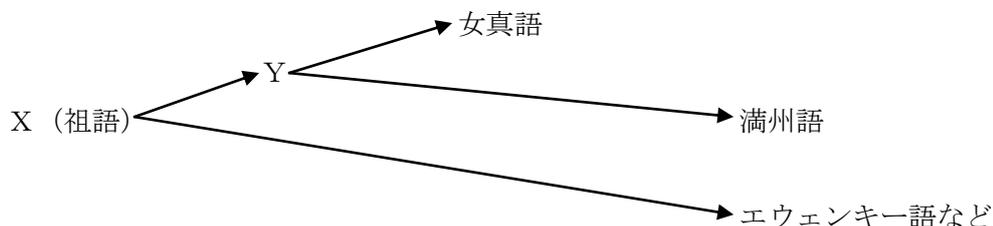
安井教授：おそらく、そういうことであろうと思うのですが・・・。

佐藤久美：先生、なにか奥歯に物がはさまったような言い方ですね。

安井教授：西田先生の「共通ツングース語」ですが、ふつうの“祖語（共通祖語）”ではないかもしれないという気がします。

佐藤久美：どういうことでしょう。

安井教授：比較言語学でいう“祖語（共通祖語）”は、同系統の諸言語を比較して、その起源となる言語を求めたもので、時間を超越した、均質な、理論上の言語、と考えるのがふつうです。しかし、「共通ツングース祖語」といわずに「共通ツングース語」とし、近い関係にある満州語と女真語を、直接に「共通ツングース語」に結びつけて、そこから派生したとするところからみて、次の図のYのような、祖語以降のある段階の共通言語を想定しているのではないか、そのように考えておられる可能性もあるのではないか、ということなのです。



山村健一：満州語は女真語と類似しており、他方ではエウエンキー語(Evenki)など他のツングース諸語と特徴を異にするとのことですので、このモデルのように、一旦はY方言にさかのぼり、そこから分かれ出た、としたほうが説明に無理がないかもしれません。

佐藤久美：西田氏の「共通ツングース語」は、祖語のXではなく、その後のYを指しているということですね。

安井教授：そうだ、と言い切ることはできませんが、そうかもしれないと考えるのです。そのようなことを、頭の隅に置いておく必要がある、ということです。

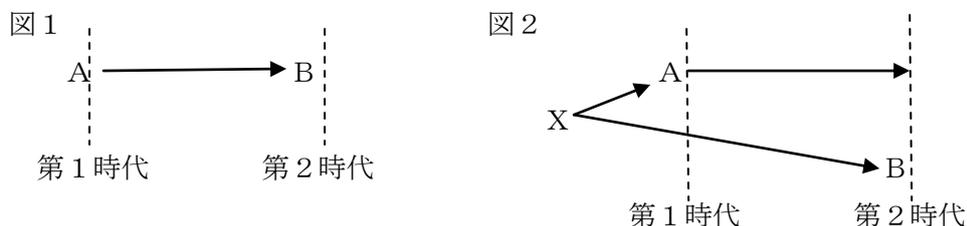
《女真語と満州語の関係4》

山村健一：いずれにしても、西田龍雄氏の考え方は、長田夏樹氏や金光平・金啓琮氏とはまったく異なりますね。

安井教授：ええ、そのとおりです。時間を異にして存在する二つの同系統の言語の関係をどのように考えるか、ということなのです。この点について、栗林均氏は「比較言語学の課題と方法 ——蒙古語歴史・比較研究批判——」（1983年）という論文で⁷、二つモデルを提示しました。「一般に、互いに同系関係にある二つの言

⁷ 『一橋論叢』89(6)：819-835。

語状態（A、B）が時代的に隔たって見い出されるとき、それらの相互関係には次の二つの場合が考えられる。すなわち、第一はそれらが同じ方言の連続である場合（図1）であり、第二はそれらが互いに言語的継続をなさない二個の方言の場合（図2）である。」（826頁）



佐藤久美：女真語と満州語の関係ですが、長田夏樹氏や金光平・金啓祿氏は図1を想定し、西田龍雄氏は図2を想定しているというわけですね。それで、AとBの関係が、図1であるのか図2であるのか、どのように見分けたいのでしょうか。

安井教授：栗林氏によりますと、図1が成り立つためには「同系単語の間に、AからBへの変化としての音韻対応が余すところなく成り立たねばならない。」とします。

山村健一：女真語と満州語に当てはめると、女真語から満州語への変化を合理的に説明することができれば、図1の関係としてよい。同じ方言の連続としてよいということですね。図2の場合はどうでしょう。

安井教授：同論文は「A、B両言語の音韻対応に恣意的で無秩序な例外が多数見出されるとき、多くの場合、それらの外に両者の収束点（祖語）を設けることによって解決することができる。つまり図2のモデルにより、祖語XからA、B両言語への独自の変化を仮定して、それぞれの言語状態を説明することになる。」とします。

山村健一：女真語から満州語への変化を合理的に説明することができない部分がある場合、図2の関係を想定して、合理的に説明できない部分については、分岐してから独自に発達したと考える、ということですね。

《女真語と満州語の関係5》

佐藤久美：ほかには、どのような考え方がありますか。

安井教授：『言語学大辞典』の「女真語」（1989年。執筆担当は津曲敏郎氏）によりますと⁸、女真語は「満州語ときわめて近く、古い満州語か、あるいはその方言であるとみられる。」とあります。

佐藤久美：「古い満州語か」という部分は長田夏樹氏や金光平・金啓祿氏と同じで、さきほどの図1の関係ですね。「その方言であるとみられる」という部分は、女真語

⁸ 『言語学大辞典 第2巻』三省堂、1989：251-253。

は満州語の方言であるということですので、西田龍雄^{にしだりゅうお}氏とほぼ同様に、図2の関係になります。

山村健一：二つの可能性を併記している。どちらとすべきか判断が難しいということですね。

《女真語と満州語の差異の等級》

佐藤久美：満州語と女真語は“類似している”とか“きわめて近い“ということですが、何に比べて、どの程度、類似しているのでしょうか。

安井教授：これは池上二良^{いけがみじろう}（1989）（「ツングース諸語」『言語学大辞典 第2巻』三省堂）が引用するデルフェル（1978）によるものです⁹。デルフェル氏はツングース諸語の諸特徴について、各2言語を比べ、一致しない和により、言語間の差異として1から21までの等級を設定します。1はわずかな下位方言的差異、4はわずかな方言的差異、5は中位の方言的差異、6は強い方言的差異、7,8は小さい言語的差異、9,10は中位の言語的差異、11,12は強い言語的差異、13,14,15はわずかな語派的差異、16,17,18,19,20は中位の語派的差異、21以上は強い語派的差異とします。

山村健一：そうしますと、言語間の差異の等級、1から21によって、ツングース諸語を分類することもできますね。

安井教授：そのとおりです。この等級を利用して、大きく三語派に分類します。北方派（ラムート語・アルマン語、エウエン語・ネギダル語・ソロン語）、中央派（オロチ語・ウデヘ語、キリ語・ナーナイ語・アムール下流方言）、南方派（女真語・満州語）の三語派です。中央派のナーナイ語と南方派の女真語の間は16で、中位の語派的差異となります。女真語と満州語の間は4で、わずかな方言的差異ということになります。

佐藤久美：女真語と満州語の間には等級4という差が実際にあるということですね。

安井教授：そのような差異があるという事実について、『言語学大辞典』の「女真語」の項目は、「満州語ときわめて近く、古い満州語か、あるいはその方言であるとみられる。」という記述にとどめた、ということでしょう。

山村健一：デルフェル（1978）は、その差異の事実を“わずかな方言的差異”としたわけですが、それが同じ方言の連続であるのか、あるいは互いに言語的継続をなさない二個の方言なのか、ということについては、検討の余地があるということですね。

安井教授：そうです。それから、女真語といっても、金という時代の女真語と、明代の女真語があります。両者には差異があるわけで、この両者についても、同じ方言

⁹ Doerfer, G.(1978) Classification Problems of Tungus, *Beiträge zur Nordasiatischen Kulturgeschichte, Tungusica*, Band I, Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

の連続であるのか、それとも互いに言語的継続をなさない二個の方言なのか、検討しなければなりません。

女真語と満州語の関係については、このくらいにして、次回からは、高校の教科書の記述の検討にもどりましょう。